摩訶般若波羅蜜多心経（抄）

Namas　Sarvajnaya.
（なます　さるぶぁじゅにゃぁや）

観自在菩薩、深般若波羅蜜多行を行ぜし時、五蘊皆空なるを照らし見ぬ。
（じん　ごうんみな）

iha　Sariputra.　色は空也、空は色也。色空と異ならず、空色と異ならず。色とふ即
（いは　しゃありぷとら）

空、空とふ即色。（畏謹中略）　能く一切の苦しみをとり除く、眞實にて虚しくあらず。
（すなわちだぁらにぃ）

故に般若波羅蜜多のDharaniを説く。　即Dharaniを説いて曰く、
（かるがゆえ）（だぁらにぃ）

逝くを終ふ哉　逝くを終ふ哉　Para〈逝くを終ふる者哉
（お）（かな）（お）（かな）（ぱぁら）（お）

Para〈逝くを真秀く終ふ哉　正斉乎　万歳成就清祥
（ぱぁら）（まほろ）（お）（かな）（さとりよ）（ささまたけくにしこそあれ）

iti　Prajnaparamita-hrdayam　samaptam.
（いてぃ　ぷらじゅにゃぁ　ぱぁらみたぁ　ふりだやむ　さまぁぷたむ）

黄昏。暗澹、強い斜光が差している。

鬱蒼たる森の奥や家屋の影、下りながら広がる草原の向こう、遠景に見える山の麓は蝶蝮背いろの深さにまどろんでいる。金光りしているのは照らされた草の葉尖の半分、嶺の輪郭や木立のふち、木製テーブルの木目、並べられた陶や銀の一部だ。

憂愁と焦燥との諧調が募り、緩やかに腐蝕のように蔓延する。アペリテフの炭酸が躍り乱れていた。人工的な、珠玉の美しさ、か。マラルメばりにそれを深海の人魚にでも喩えてみたまえ。大した気障というわけだ。既に意味が忘れられた、ありきたりな批判、嘲笑でしか維持できない優越、多少は嫉妬もあるのか。素敵だ。たまらない。物憂げにステムに手を添えて、傾けてみようか。

楠木が逆光を浴びている。風に揺れる木葉のシルエットから洩れる烱(きら)めきが炎のようにちらちらしている。あれが僕の焦燥だ。一日の終わりを告げる、なんとも優しい夕べよ、遙か彼方には一雲が緋に熾え、ふちどりを燦々とさせながらも刻々衰えている。

グラスに唇をつけた。よくなじんだ味だ。堕落。コスプレじみたデカダンスの意匠。バカラ社製カットグラスの明晰な透明さが異様にリアルだ。

いや、グラスばかりではない。こんな黄昏の光だもの、ありとしあらゆるものが低音弦がユニゾンでなす旋律のようではないか。

茜色を帯びながら透けている金の光射が絵皿や碗、眩いナプキン、銀のフォークやナイフやスプーン、それら一切をオレンジに柔らかく染め、布のきめや銀製の造作や陶磁のつやの滑らかさをよりまろやかにし、色深く晰らかに、濃く鮮烈にしている。

風が、額から垂れて視界を翳していた前髪をなぶった。だから僕は眉根を寄せて顔を顰めてみせる。日が額にあたって暖かい。眩しい。

理由のない不安、諸細胞からわき上がるような暗鬱に侵される。シガリロを点けた。パーティだもの、さざめくように微笑する少女らの睫毛の動きや、夏の帽子を粋に傾けてスノビッシュに唇を歪ませる同世代の男たちの若々しい群像が無音のように網膜の中心窩に映えている。

だがあれはどうして起こったのだろう。なぜあれが僕の心にきざしたのかわからない。ただ茫然自失として時をやり過ごしていた。草上の夕餐という趣向にまったく心熾さずに、いつもの如く眼窩の翳りと眉間の峡谷とに沈んでいただけであった。

欅の木々の繁りの葉ずれ、浅瀬のせせらぎが止まり、静寂に包まれた光芒が全世界を蔽

った。それは直下して破裂する隕石のように彼方から凄まじい勢いであっと言う間に迫り、視界を眩さで消失せしめたのだ。既に新たな世界が現前していた。驚くべきは従前と変わらぬ状景であったということなのである。まったく変わらぬのに一切が異なっていた。

なに一つ新しい経験がない。渇水に晒された葡萄が醸造されて鼻先にまとわりくすぐる芳香や、ふくむと味蕾を刺激するタンニンのにがみなどが意識と呼ばれるリアリティを以て唐突に全世界をなしていただけだ。僕が思うに意識は暴虐でしかない。

色即是空空即是色という有名な聖句が思い起こされた。釈迦牟仁仏の死後少なくとも五百年は後に作られたと思われる摩訶般若波羅蜜多心経の一節である。

僕を陶然が襲った。

震える手で無意識にフォークを牛肉のカルパッチョに刺す。静謐なる興奮状態に堪えられずに逃避を企てたのだ。オリーブオイルにひたされたそれを口に啣む。オイルは軽らかでえもいわれぬ味わい。いつもどおり味覚芽への刺激という存在者として僕に現前している。これが目も醒めるような悟りを与えてくれることがあるものだが、このときは来なかった。

期待し求められたカルパッチョは希望どおりのカルパッチョであった。だがいくら精妙であっても、一瞬時前に知った覚醒に比べれば、なんと猥雑で圧迫感があり、狭隘か。愕然とする。シャンパーニュを飲んでも炭酸の刺激が虚しく喉を射貫く。気が附くと会話はマンハッタン最古参のマックソーリーズ・オールド・エール・ハウスというバーの話からダーク・ミカエル関連のお喋りに移り変わっていた。

「観たわよ、エモーショナル・トリップ・ショー。タイムズ・スクウェアのサタニック・シアター」

「例のマジック・ショーかい?」

「俺も知っているよ。百二十席くらいの狭い劇場で観客が囲むようにステージがあるんだろう?」

「ねえ、それ私も観たいと思っていたのよ。最近、ニューヨークに行っていないし」

「あれはマジック・ショーじゃないわ。総合芸術よ。音楽構成仕掛け演出、すべてダーク・ミカエル独りでやっているわ。観る者の人生の一瞬を創生するアートよ」

「ねえ、観たいわ」

「来月、友人の誕生パーティでニューヨークに呼ばれているんだ。一緒に行かないか。チケットはすぐ取れるよ」

「私は誘ってくれないのね」
「でもさあ、ワールド・マジック・ソサエティから賞を貰っているぜ。なんとしようともカテゴリー的にはマジックとして位置附けられているんだよ」
「わかっていないだけよ」
「でもね、恐らくは」
「なに？」
「ギリシアの野外劇場で観た古代悲劇には敵わないと思うよ」
僕の脳裏にいきなり、円形の舞台に現れる十二人の合唱隊とそれに続いて登場する仮面の役者の大振りな衣装姿とが泛ぶ。
「へえ、どんなものなの」
古代ギリシア悲劇は役者の詩の朗誦である科白（エペイソディオン）と合唱隊の歌及び舞（スタシモン）とが交互に繰り返されることで構成される。
「それってアテネの、ほらアクロポリス丘の麓にあるオルケストラー？」
都市国家アテネで最初に悲劇の競演がなされたのは紀元前五三四年のディオニューシア祭（ディオニュソス神に捧げられた祭礼）で第一回目の優勝者はテスピスであった。
「違うの？　わかった、エピダウロスだ！」
「あっ、私も観たことある。アルゴリダにあるやつでしょう。それに野外なのに吃驚するくらい声が反響してよくとおるの。マイクなんかないのよ。というか、なんにもないの。合唱隊と役者だけでなにもないのよ、円舞台に」
舞台装置など用いられなかった。俳優はいかなる劇でも三人と決められ、必然的に一人数役をこなし、場面によっては自分の役が同時に舞台に上がることとなるため、配役を替えながら行われた。
「僕も知っているよ。行ってはいないけれどね。演舞場の囁きが五十五段目の最上席まで聴こえるっていうじゃないか」
「わかる、それ。屋根がなくとも反響するのってなんか不思議よね。北京の天壇にあった圜丘もそうだったわ」
「とてもシンプルなんだ。だから凄絶な場面はより凄絶になる」
悲劇作者は歌詞や音楽、舞踏の振り付けから監督や練習の指導までも行ったという。テスピスも自ら舞台に上がったらしい。
「ギリシア悲劇か。アテネの有名な古代悲劇の三大作家って、アイスキュロスとか、ソポ

クレスとか、エウリピデスとかだよね。古典ギリシア演劇史だ。憶えているよ」

アイスキュロスだって若い時代には同じく配役をこなした。ソポクレスは美形で舞いもうまかったが、声が小さかったため、俳優として立つことができず、慣例を破ったと伝えられている。

「で、なにを観たの」

「メディア」

「それって男に裏切られて、その男との間にできた自分のこどもを殺した女の話だったよなあ」

「エウリピデスのやつ？」

「彼もメディアを書いたけれど、多分、それじゃなかったと思う」

「相手の男って、確かギリシア神話の英雄よね」

そう。イオーリコスの王子イアソンだ。アルゴー船の遠征だ。メディアとは父王を裏切ってイアソンを助けたコルキス国の王女で、イアソンとともに自分の弟であるアプシュルトスまでも連れて故郷から船で逃亡するが、追ってきた父アイエーテースが迫るのを見ると弟を八つ裂きにして海に投じ、亡骸を父が涙して回収する間に逃げ果せ、後にイアソンと結婚して子をなし、十年幸せに暮らすも彼がコリントス王クレオーンの王女グラウケーと婚約しメディアを離縁しようとしたため、神々に向かいイアソンを呪詛し、グラウケーとクレオーンとを烈火で焼殺してイアソンとの間に生まれた自らの子メルメロスとペレースとを殺戮し、太陽神ヘリオスから貰った有翼の龍が牽く車に乗って空を遁走した。

「けれどさあ、いくら裏切られたからって、罪のないこどもを殺すかあ」

「自分の子なのよ、信じられないわ」

「だがよ、それが愛執の情念ってやつじゃないのか」

「だからって、よいことじゃないだろう」

「そらそうさ、わかっているよ。ただ現実はそれじゃ収まらないっていっているだけさ」

「現実じゃないだろうが」

笑いが起こる。僕はいつの間にか右拳を頬にあてて杖とし左手指先でワイングラスをいじりながら思い耽っていた。運命の女神のような破滅の予兆を孕んだ合唱の響きとともにメディアの形相が僕には観えていた。弟を殺してまでも狂恋した男に裏切られた女の凄絶な表情が泛んでいた。

彼女は翼竜の車で天を疾翔したのだ。

僕にはそのときのメディアが吐笑しているように観えた。狂気のごとく、またなに者かを嘲るがのごとく、けたたましい笑声で蒼穹を裂くその場面がありありと観せられた。いずこからともなく起こった自らの思いつきに僕は唖然として魅せられた。

獅子の如く棚引く血塗れの髪、オケアノス（天空［ウラノス］と大地［ゲー］との間に生まれたティターン族の一人）の娘エイデュイアにコルキス王アイエーテースが産ませた女、只人ならぬメディアの騎飛する狂乱の姿が僕を癒す。

「普蕭（ふしょう）くんはいつも黙っているのね」

いわれて我に返った。

アルジャンティエが入念に調整したグラスや皿の位置もすっかり紊れ、仔羊のロティが出るころである。篝火が焚かれ熀（かがや）いた。空の覆いがなくなり星々が想像を超える拡がりを露わにすると見る者を吸い込むかのようで轟音を立てて地球がその空間を突き進み移動していることを直観させる。この大いなる大地すらもこの星間においてはあの小さな燦めきの粒以下なのに。

風。楠欅樫櫨楢の梢が葉の小波を一斉に潮騒させた。柔らかな肉を頬張りバーガンディを飲む顔顔の鼻丘を境に半分が漆黒に蔽われ炎に移ろう。薄い雲が翳り過ぎっては満月輪が烈しく射す。僕は明日ここを出立して家に帰ったなら摩訶般若波羅蜜多心経を研究しようと決めていた。

執事に案内され移動した。石彫の装飾が蔦草の如く絡む欄干の直ぐ二m下は湖であった。一㎞先の対岸に聳える蝮蝮の背色をした山巌の頂に月が皓（あきら）めいている。設けられたテーブルは花々の繚亂、カットグラスに仄かに映えた。食後酒が奢り振舞われる。暖炉がいとおしくなる気温ともなれば真鍮枠にガラスを嵌めた大扉が開け放たれマントルピースの薪が燃え盛るアレスの間で思い思いに安楽椅子に坐わることもできた。僕は湖面に照る月光を暫時嘗味した後は緞帳のような見上げるカーテンが金の紐で縛られたおやかなドレープをなす傍らを通り、円形に縁取られた巧緻なアレスの浮き彫りある室内のイスファハン絨毯を踏んで葉巻とコニャックとを頼んだ。カットのサービスを受け専用のライターで好みにウォームアップするもまだ慣れず折角のキューバ産に咽る。

馨る木材の燃焼を眺めるうちに心は自然と瞑想に戻った。他に照明はキャンドルのシャンデリアだけだった。なぜこういった陰翳は人を黙考へと誘うのか。わからない。こうして自分の生きている瞬間の不思議だ。捉えようとすればするほど隔たりの虚しさが生じるばかり。意識することによるどうしようもない乖離感だ。人間をより隼燥に駈り立てる一

つの効果なのかもしれない。

嵌木細工の円盤と華奢な脚との小卓、シルクと仔羊の毛との混紡でセンネ・ノットされたアラベスク模様、それらは分厚いクリスタルガラス越しに見られる事物が晰らかに自らを示すのと同様の効果を以て僕を堪らなくさせた。

数日後だ。

署名を済ますと学生証書をしまい、司書の説明に従って僕は目指す書棚の前に立った。湖畔の別荘を辞した翌朝だ。僕らは数百年前に亡くなった公爵夫人に感謝せねばなるまい。いまでは国家管理となったものの彼女が城館を改築し図書館として蔵書を一般に公開した経緯がなければこれら知的財産を自由に散策することはできなかったのだ。目的の皮革装丁本はすぐに見つかった。

手にして頁を忙しくめくる。奈良の正倉院に保存されていた貝多羅葉（椰子科のタラ樹の葉。古代インドではこれを乾燥させてサンスクリット語を写し経典とした）による摩訶般若波羅蜜多心経を紹介し解説した書籍で一九六九年の刊行となっている。僕は憑かれたように読み耽った。心経がインドで成立したのは紀元後二世紀の半ば頃とされ最初の漢訳は四〇二年鳩摩羅什（クマーラジーヴァ）が訳出したものらしい。玄奘がなした訳はその後だった。

内容は徹底して空観を訴える。人間と世界とを構成するエレメントから五官や色声香味触も无であり、老病死苦もなく、老病死苦からの解脱（覺り）もないと説く。色即是空で有名な一節は語りの初っ端から出てくる「色空。空色。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色（物的現象［絶えず変化し二つ以上が同時に同じ場所を占有できないもの］とはなにもないこと［零（シューニヤター）］であり、なにもないこととは物的現象と離れてはない。物的現象の接受も、接受された情報の了受も、その結果である形成も、またこれによる識別も、色と同様に空である、の義」　そして最後にあらゆる苦しみをとり除くとされる聖句（ダラニ）が教示される。

羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提娑婆訶（ぎゃていぎゃていはらぎゃていはらそうぎゃていぼじそわか）

インクの象るこの点綴を覧た瞬（とき）、舌の奥の味蕾が渋くなり、金銀と様々な色調の螺鈿とを細緻に象嵌して九匹の龍の群れや天を遊弋する獅子や有翼の牡牛など数多の聖獣らを絢として織りなす眩い装飾を想起させられた。未だ僕はこれを遙か以前から知っていたという想いから逃れることができない。髣髴としたものは波であった。かつて東山魁夷画伯が唐招提寺の大襖絵に描いた海の生を捉えたような色調の、その広間に胡座したならば清澄な潮騒に包まれるように思える青や蒼や碧の柔らかく深く、幾つにも重なる音調、海

潮の織りなす絢であった。それらが繚(まと)わりもつれ紡ぐラビュリントス、古代クレタの王ミノスの築いたクノッソス宮殿にあったという伝説の迷宮である。現に僕の眸の虹彩が限りに曳く水晶体の裏に映ったのは『パリジェンヌ』と通称される壁画であった。図は真横から見られた少女の姿写しである。弓なり眉にユニゾンする放物線状の曲線を以て睜かれた大きな眸、額から降りてくる鼻筋のラインの途中が緩やかに高くなりその後少し落ちて再び鼻尖に至って高まり、すっきりとまとまる。

僕は久しく前から彼女に恋情を感じていたがこんなにもリアルに心に顕われる瞬間こそあの少女のような人が僕の前に現れなければならない。それはバスドラムの鼓打音が原初的な昂奮をかき立てる即物的刺激同然に晰らかであった。まったく以てこれは素敵なことだ。諸細胞の中でミトコンドリアがエネルギーを製造しているだけなのだ。

書籍から必要事項をメモする。アパートに戻った。

暮れても灯さず、机に肘を突いて窓外を眺め、心を瞑目する。葉の音で雨を知る頃には暗くなっていた。雨が好きだった。部屋が陰翳に沈む。湖底にいる雰囲気になった。隅陰に魑魅がうずくまっていても不思議はない。この気分を継続しようと意図した。筋繊維の蠢く総体が緩やかな炎と観ぜられ、その海の如き揺れに身が解れる。夜空に稲妻が走った。雲間に青龍の脚股が刹那映じたような気がする。裂雨となった。心が静まり、やがて開かれ始める。蒼穹のように広く涯しなく、翔けるように、思いが喪われた。

龍の群れが泳ぐように飛翔する天空だ。身を雲の上に載せても落ちない。僕は結跏趺坐している。罣礙となる何者もない自由感とすべてが可能となせる予兆にあふれ満ちた自在感とによって軽やかに自失する。

だが執著を熾し意識してこれをつかもうとすれば途端に尖った象りを做す。軽やかさは喪われる。象りなくば手には入らない。象り做さない意識など為せない。尖りがなければ意識たり得ない。手に入れられなければ意味がない。なぜ現実は思いどおりにならないのか。畢竟人間の求める一切はこれに帰結するのではないか。なんの罣礙(さわり)もなく、滞りも抵抗もなく、欲望がすべてそのままに叶い、意のままになる、自由自在で天翔するが如く軽やかな状態こそが人間の願望の畢竟の到達ではあるまいか。まさしく成就と言うにふさわしい究極の幸福ではあるまいか。

人間の営みの一切はこれが為にあるのではないか。この利を求めて為されるのではないか。あらゆる事業、競技、科学、宗教、芸術、哲学、正義、家族や恋愛でさえもここに至らんが為にされるのではないか。

虚しい。意識は尖りでしかあり得ないのだ。意識とは意識すると言うときそれが気にかかると言うのとほぼ同義であるように抵抗性なくしてあり得ない。存在感という言葉がいみじくも示唆するように気遣いと密接に関連する。

修正の余地などあるまい。今のシステムじゃないかたちの意識なんて人間には想像すらも及ばない。ばかげた夢以上の戯言だ。

詮方ないことだ。そもそも意識は僕のものではなく、僕は意識が做す現象でしかないのだから。意識システムの改正など議論以前だ。

ああ、ほんとうに。意識が意のままならどれほど好いだろう。それは一切が思うがままになるのと同じだ。真の意味において死すら免れる。世界の主宰者となるに等しい。無論そんな日は来ない。僕らは意識の主体者ではないから。コギト・エルゴ・スムなどと戯けた科白だ。

僕は考えていた。

ばかげた考えだった。気分を変える。だがいつのまにかにその思いに戻るのであった。雨が窓ガラスを叩き割ろうとしている。なにを憤っているのか。僕の不遜な欲望が群雲のように盛り上がるのを激怒するか。神が踴怒する。

眠らない。夢にいるみたいだった。

夢と現実との境なんてあるのか。

だいたい僕は起きていても眠る男である。いや精確に言えば眠り切ってはいないのだが夢を見る。

講義を受けているときなどでも夢が眸の表面を過ぎることがある。頬杖を突く。目蓋が下がる。眠気が奥から湧き上がってくる。すると眠らないうちから夢が見える。現実画面と夢の画面とが重なったように映る。

普通に本を読んでいたり、カフェで街行く人々を眺めていたりするときにも、ふと夢に入る。一秒にも満たない。めざめる。現実に返る。からだは未だ夢の中でやっていた続きをやりかけている。違う場所に唐突に投げ込まれたかのように驚いて見廻す。

そして思う、もしあの夢にこうして終わるときが来なかったとしたら夢は現実と変わらないではないか、と。それが実感である以上、実感こそ優先であるべきでこれをさまたげるならそれは人間疎外だ。それに夢も現実も同じく意識なのだから論理的に考えても僕の感興は当然の帰結だ。

一貫性（若しくは継続性と言うべきか）がないのが夢であり、それがあるように観られ

るのが現実である。

般若波羅蜜多心経は陀羅尼（Dharani）である。それは呪文のことだ。精確に言えば経（スートラ）ではない。なぜ昔の人はそんなことを本気で考えられたのだろう。昔の人は愚かで僕らが悧巧だからか。誰しも即座に眉を顰める偏見だがそれでいて殆ど無意識的に蔓延しているふつう人の先入観だ。

時代を遡るほど人間はなんの保証もない環境で生きていた、と見るのが大局的には正解だろう。心経の時代はともかくとしても、その起源であり、呪術の成立した太初においては贅肉的な思想の余地があったようには思えない。人々が苛酷な環境に生きていたとすればなんら実効のない、いい加減なものに明日を委ねる気になれる筈がない。そんなことをしていたら生き残れない。少なくとも呪術黎明の初原においては実際的な有効性があったのだ。そうでなければ逼迫した生死の狭間でたちまちに捨て去られていなければならない。

それが僕の不遜な考えの唯一の論拠だった。

真実は苛虐な状況で試される。平穏無事ならなんとでもいえる。ナチス占領下のパリや治安維持法改正後の日本でいかなる行動をしたかが人間にとっての真実性がなんであるかを解析させる。

平穏時に強がる人間は腐るほどいる。愚かだ。強がること自体が愚かさである。強盛は余暇の産物でしかない。目を蔽わずにいられぬ残忍な拷問、想像すら絶する絶望的状況、だれが動ぜずにいられようか。苦しみとは自らに課せられた身魂の悶ばかりをいうのではない。無辜なる他者の虐死、病苦、涙をも含むのである。その切実を現に自ら胸に感ずるから人は蒼天を希う。真実や正義を求め訴える。

本質（イデア）（正しいがゆえに必ずや実在しなければならない、純然たる、あるべき実体）である諸概念はそのための枝葉であり、方便であって、その実は空っぽ、『イデアがない』があるのみである。ただ実存しかない。すなわち空がある。特徴（保持されてあるもの）は一切皆空である。それは実存としてあるのである。

だから空といっても切実性は損なわれない。むしろ非情性を増し、全希望を遮蔽する威容を以て眼前に聳える。概念上の空ではない（もしそうならばなんら問題があろうか）実存上の、生身に感ぜられる空だからである。現実が非道なる物的世界としてしか観取されないのはその構造のためである。

いや、それを論ずるときではなかった。

ともかくも心経は有効なのだ。だが僕は思考する。心経はなぜ有効なのか。

僕は時間性をその原因として想定した。なぜなら時を経たものは不可思議な効力を有するからである。誰もがそれを感じてはいないだろうか。それを歴史性と呼んでも善いかもしれない。まるで千年生きた猫が妖怪になるように、数千年を経た杉の古木に異様な神性を感じないものだろうか。時は累積する。これは喩でなく事実であるように思われるのだ。心経の有効性もその内容が真実性であることと同時に、今日まで何十億もの人々が保持し、祈り続けた心魄が積もってこのような力を生んでいるのではないか。呪文というものがそう云うものではないのか。

時間性の持つ効力、いくつかの特性。変遷移。未来可能。累積性。霧散性。不可逆性。そして存在との不可分性である。

なお、僕が思うに時間性の累積性には先取的、予見的累積性がある。すなわち累積を見込んであらかじめその特性を有するものであり、文学でいえば名作、俳優でいえば才能あふれる新人である。つまり累積性は（畢竟、時間性そのものが）時系列的な限定を受けない。この段になって漸く時間性というものが、通俗的な解釈による時間とは異なるものであることがわかると思う。

累積性から見るとき、存在とは累積である。累積とは生成であり、本質を熟成し、醸し、膨らませ、厚くし、構築すると同義である。

存在が意識であり、意識が他者性であり、他者性が客観性であり、客観性が一般性であり、一般性が普遍性であるのは、あたかも自明のようであるが、すべては脱自態への志向を示唆する。すなわち一切方便にしかず、脱自態への志向を脱自態への志向という単一の特性を表す名称で表現することは妥当ではないが、かといって名前の附けようも区分のしようもない。

《脱自とはなにか?》

一匹の猿がいる。

猿の好物の餌が置かれている。

猿と餌との間には適当な距離があり、軽易な障害物がある。

猿は障害を迂回して餌を取りに行くことはできるが、餌に障害を迂回させて自分の手許に引き寄せることができない。

具体的には、繋がれた猿が手の届かないところにある餌を引き寄せようとして手近にある棒を使うときに障害物があ

った場合、それを迂回するように餌を引き寄せればよいが、それができない、ということである。

人間にとっては自分が迂回するも餌が迂回するも同じだが、猿にはそれがわからない。餌を迂回させるには自分を餌に置き換えられ、自分が餌の立場になってどう動くかが考えられなければならない。

動物には物という概念がない。自分以外の存在を存在者として捉えられない。それが食べられるか、危険であるか、飽くまで自分にとってのシグナルでしかない。自己に封ぜられているといえる。

人間は自己を越えて物の存在を認められる、すなわち人間は動物より脱目的な存在なのである。脱目とはそのような意味であり、一般性、客観性、普遍性に直結する。

いかなる行為であれ、イデア論的な要素で構築された、いわゆる『純粋な動機』、というものを、少なくも人間においては想定することができない。そういい切ってしまっても現実的な問題は生じない。あらゆる事件、事物は存在しているかもしれない。だがそれが現に事件であり、事物であるのは、実はそれに本質である特性からではない。それがそうだからあるのではない。脱目への志向のために方便として投企されたことによる。だからそれは現に存在し、現に起こっていても実際は無空ですらなく、強いていえば非影響で非関係で非空以前のものである。

とはいえ、この論自体も論旨の対象であることを思えば、籤占いが当たらぬことを籤占いで証明しようとするようなものである。当たりと出ればあてにならぬし、外れと出れば当たりになってしまう。

そもそも理叡、了解などと称して僕らは何をわかっているか。

理叡を以て做された了解とやらは本当に理叡であろうか。

ただ忽然、納得と呼ばれる心的現象が僕らを襲い、気が附けば既にその情態の中にいた、ただただそれだけのことではないか。

そもそも了解がいかなる経緯をたどり、いかなる理由からそのかたちするところに落ち着かなければならなかったか、了解と云うことがどう云うことであるか、その縁取りと云

うものが何であるかを説叙し得ぬとすれば、それを理叡と呼びつつも何を以て理叡と言うかを知らずして言うのでしかない。ならば少なくも僕らに既設された価値観にとっては、それをして一般に理叡とは呼びがたい。

顧みれば、諸概念の本質たるべき理叡がかくなるかたちに定められた拠を知らず、諸概念を以て理叡的に全事象を把捉していながらも、ならばそれで何を把捉しているかを了解していない。そもそも諸概念のどこに理叡性があるか。それよりか理叡性とは何か。了解している諸概念の内容の理叡性は理叡性として観取されており、まさに理叡性があるが、それは理叡と云うものがあると云うのみにてそれ以上何もなくば、理叡と言うよりかは非理叡と呼ぶべきではないか。非理叡であれば何をか了解したと言えるか。非了解と呼ぶべきではないか。ならば知とはなり得ず、無知と言うよりかは非知と言うべきではないか。少なくも先天的に与えられた価値観には非知としてしか映えない。

とすれば一切が非知にして非了解、非理叡であることが人間に先天的に与えられた範疇表に従う限りにおいては当然のことと了解するが、それはどう云うことを意味するのか。何をも示唆しない。

由緒も根拠も知らぬまま、ただ与えられている先天的価値基準の一切、範疇表は当然、その了解たるの根本である理叡に支えられて成立している。そうだとすれば理叡が非理叡であると云う批判は自己矛盾だ。この叙説はあり得ないラヴィリュントスへ人を陥れる。それなのに非了解、非理叡として平然と活命し、日常的に意識を做している。

一切の諸概念の本質である理叡性自体の内容が物質であるも同然の殺伐、無味乾燥であり、非情なる岩膚のごとく無表情であることが歴然たる実存上の事実として、現にそのようにある。この現実は論議を遙かに超越しています。最初から僕らはとてもかくても候、な場所にいるのだ。

眼前に恐るべき深遠が海よりも巨大に、まるで大宇宙空間のように横たわっている。僕は次第に狂おしい幻想に囚われた。

ほら、幸福じゃないか。

棺桶。それに葬列が行く。

午後のカフェにて。陽射しが石畳を白く眩く燦爛とさせていた。

「時って不思議なものだよ。あった筈のものがいつのまに知らず失せている。僕ら見ているものはと言えば一瞬前かそれ以前の過去ばかり、喪ってしまったものばかりだ。諸現象は既に喪失したもの以外ない。

僕らが愛しみ合っている瞬(いま)このときも一瞬の前のことなんだね。いったい、僕らはなにをしているのだろう。現実はどんなに切ない願いも無視し、虐殺を繰り返す。そうだろ、彝黎(いれいぬ)ヌ。

雨は愛する者らにも憎い者らにも降る。僕らの感情など事実ではないかのようだ。霊魂は悪しき者らにも善き者らにも怒りの鞭を振る。僕らの執著など夢想にすぎない。悲嘆に暮れる者らや虐げられたる者らに同情を差し向けてこれを救ったとしても報いられることなどなく、身にまとうものや喉をとおす一滴をすら持たぬまま、みとる者なく路傍に斃れることだって現実には起こり得るじゃないか。

僕らは考える。義しさとはなにか。なぜに義しく為すべきなのか。なにを為せば義しいのか、と。真理は哲学のうちにある。哲学は人間のうちにある。その人間の動機のうちに哲学の本体は存する。

僕らは失われることのない心の平和を欲している」

僕は自分の送葬を眺め続けていた。